

「晴雨計・その後」⑫

「祭りの後」1

平山征夫

私が新潟日報・夕刊に三ヶ月に亘って連載した随筆「晴雨計」は、前回お送りした「ユーフォーリア」をもって二十四年前の四月下旬に終わった。それから約一か月後の五月終わりに私は三年の日銀新潟支店長勤務を無事（？）に終え、仙台支店長として「杜の都」に赴任した。

当時は、役所や大手企業の支店長が新潟から転勤する際には、駅頭に多くの関係者へ芸者さん、馴染みのクラブのママなどを含む）が見送るのが慣習となっていた。大抵の支店長は単身赴任

なので、この駅頭の見送りに、

もしかして柱の陰に良い人でもひっそり隠れて来ていないかチエックしている悪もいる。私の場合全くその心配はなかったのだが、「晴雨計」の「品質保証書」に書いたK氏の奥さんが、発車直前に赤ちゃんを抱えて遅れて駆けつけてきたので、思わず赤ちゃんを受け取って抱っこした。（隣に妻は立っていた）その後で「ついに隠し子登場」という話になったそうだ。「そうだ」というのは私は仙台に行つて噂になつているとは露知らず、Kさんが「すいません。ややこしいとき登場したもんで・・」と謝つてきて初めて知った。

仙台生活も順調に慣れ、仙台

の盛り場国分町の様子もわかり、

新潟の姐さん達から言付かった仙台の姐さんへの紹介の伝言も果たした頃には、仙台を彩る「七夕祭り」を迎え、東北の短い夏を謳歌した。そして夏が終わるころ仙台地元の河北新報から夕刊の随筆連載を依頼された。新潟での連載から四ヶ月のブランクでの再登場だ。

ところが、これが波乱万丈の人生の序幕だった。最初の原稿（「祭りの後」）を提出して、夫婦で初めて本格的な海外旅行に出かけた。日銀が二十五年の勤続の記念に十日の休暇とささやかな小遣いをプレゼントしてくれたので、イタリアとオーストリアのツアーに参加したのだ。

以前から行きたかったヴェニス、

フィレンツェ、ローマ、ウィーンなど回り、ご機嫌で帰りのJALに乗ったところ、流れてきた日本のニュースを見てびっくり、「新潟県知事、佐川事件で辞任」。それでもまだその時は「新潟も大変だなあ。誰が後任になるのかなあ」と他人ごとと思つていたが、帰国して仙台の支店長宅に着いてからは電話が鳴りっぱなし。突然お出馬要請だ。この後はご存知の華麗（？）なる転身の筋書を歩むこととなるわけだが、このツアー参加が最初の予定に人が集まらず、繰り上げたため出馬要請と日程が合ってしまった。最初の予定通りであれば、大騒ぎを横目に遺跡

と絵画を見てスパゲッティに舌の後」を書くこととしたい。

(平成二十八年八月十二日)

鼓だったはずで、人生はわからない。それで、仙台での夕刊随筆は九月の四回で途中降板、後を次長の新保君(小千谷の出身)に頼んで、九月末仙台を引き払い、急遽新潟に戻って即選挙戦に突入した。新保君には迷惑をかけたが、急な辞任に仙台では「歓迎会が終わったら送別会と言う人も珍しい」、「七夕祭りを見に来た人」など言われるし、戻った新潟でも「饞別にやったパターン返してもらおう」など何かとやかましい。こんな話も今では四半世紀前の思い出だ。

こうした経緯で「晴雨計」の番外ともいえる随筆があと四本あるので、これについても「そ